明珠

龍泉院
参禅会会報

5
昭和62年4月8日

従容録に学ぶ(四)

第二一則　雲巌掃地

〔示衆〕

衆に示して云く、迷悟を脱し、聖凡を絶すれば、多事なしと雖も、主賓を立て貴賤を分つことは、別に是れ一家なり。材を量って職を授くることは即ちなきにあらず。同気連枝、作麽生か会す。

〔本則〕

挙す、雲巌掃地の次いで、（沙弥・行童、気力を得ず。）道吾云く、太区区生。（兵を埋んで闘を挑む。）巌云く、須らく区区ならざる者あることを知るべし。（惜しむべし、話両橛と作ることを。）吾云く、恁麽ならば則ち第二月ありや。（豈に第二に止まらんや、百千万箇。）巌、掃箒を提起して云く、這箇は是れ第幾月ぞ。（水昌宮裏より出頭し来る。）吾、便ち休し去る。（尽く不言の中に在り。）玄沙云く、正に是れ第二月。（一人虚を伝うれば、万人実を伝う。）雲門云く、奴は婢を見て殷勤。（邪に随って簸箕を撲つ。）

雲巌掃地

雲巌曇晟禅師（七八一～八四二）は、中国曹洞宗の系譜では、石頭希遷―薬山惟儼―雲巌曇晟―洞山良价、という地位にある重要な祖師です。『従容録』でこの方をテーマとする則は、ほかに第五四則の「雲巌大悲」があります。

さて、曇晟さまが禅道場を開かれた雲巌山は、湖南省醴陵県の中心から西南四七キロに位置します。わたくしが一九八三年の秋に訪れた時、寺址は水口山林場事務所となっていて、寺の建物は荒れはてた観音台一棟を残すだけでした。たずね当てた歴住者の石塔は、事務所の右隣りに立つ小学校の庭で、テーブルとイスになっていました。

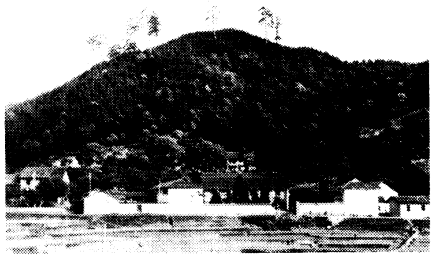
しかし、ここは一千年以上も前に、まぎれもなく洞山・道吾・石霜などが修行した道場であり、山は九峰がとり囲む景勝の聖地です。

本則にみえる道吾は、道吾山の円智で、雲巌の実兄とされる人。玄沙はかの「尽十方世界一顆明珠」を説いた玄沙師備、雲門は雲門宗を開いた雲門文偃のことで、ともに唐代の禅匠たちです。

まず、雲巌の「示衆」の大意は、迷悟や凡聖などの相対を離れた心こそ大安心の世界であるが、平等の中にも差別のある道理がわかるか、という問いかけです。同気連枝とは、異体同心の兄弟のこと。

宏智の「本則」は、これをうけた公案です。雲巌が掃除をしていた時、道吾が大区区生、つまり「大へんご苦労さま」とねぎらった。すると雲巌は、「一向に骨の折れないものもありますよ」というと、道吾「それならば、区々と不区々の二つになりましょう」と。第二月とは、目をこすって月をみると、あたかも二つの月のようにみえること。そこで雲巌は、持っていた箒木をさし上げて、「この箒木は幾月かな」というと、道吾は静かに黙した、という話です。

後に玄沙がコメントをつけて、わしからみればやはり第二月だ、といい、雲門は、下男と下女の親交する場所は主人の出る幕ではない、と面白い評をくだしています。一方、万松は雲巌の「第幾月ぞ」と道吾の黙した態度を高く評し、玄沙のコメントは邪法、雲門は大言にすぎると評しています。これは、けなしているのではなく、大宗匠たちはみな第一義からそれてはいない、とほめているのです。



雲巌山の現況

この本則の眼目は、雲巌が、本来の面目以外に、もう一人の自分などありえないことを教えたところにあります。と同時に、まっさらで平等一色の本来面目も、具体的には千差万別の現象として現われている道理をも示しています。そして、こうした深い仏法の第一義を、唐代の禅者たちは、ありふれた清掃作務をしながら、互いに確かめあっているのです。まして出家は雲巌が先ですから、法の上では兄弟子で、法を求める仲間同志の親切さに打たれる思いがします。

雲巌のもとから、曹洞宗を開いた洞山が打ちだされています。洞山は、雲巌から無情説法の道理を聞いて悟れず、そのもとを去って大河を渡るとき、水に映る己れの影をみて大悟徹底し、有名な「洞山過水偈」を詠じました。

まだ雲巌に学んでいたころ、施主からチマキのふるまいがありました。五月五日の端午の節句で、禅寺ではたいへんなご馳走です。雲巌が大衆にくばった時、洞山だけはまた手を出し、「もう一人おります。」雲巌「だれかまだ食べないのかね。」「いえ、いただいたら食べます」と。

おわかりでしょうか。両者はチマキにちなんで、やはり本来の面目について確かめ合っているのです。『祖堂集』という禅語録に出ている問答ですが、こんな話しは無数にあったようです。唐代の禅者たちが、何とも大らかでくったくのないままに、ありふれた日常生活を、すべて道のために生き、法のために行じた生きざまが感じられ、すがすがしいばかりですね。

わたくしたちも、道を求めれば、それは脚下にあります。掃き掃除をするとき、わたくしはいつも師匠が「箒木を使うのは字を書くのと同じさ」といっていたのを思い出します。すると、草とりや庭はきの作務がありがたくなります。この、ありがたいと思う心こそ、本来の面目ではないのでしょうか。「行もまた禅、坐もまた禅」といいます。少しでも坐と同じレベルで、生活を行じたいものです。

第四回成道会参加者一同（S61.12.7）

第四回成道会を厳修

昨年一二月七日（日）午前九時から、お釈迦さまの成道を祝して、参禅会員四一名（男三二、女九）が龍泉院に集い、御老師ならびに二名の随喜僧のご指導をいただき、第四回成道会（じょうどうえ）が厳粛に行なわれました。

行事は、三〇分ずつの報恩坐禅を二回、間に一〇分間の経行（きんひん）（歩行禅）が行なわれました。つづいてお釈迦様の成道をたたえる読経供養があり、最後に御老師より法話をいただきました。御法話の中で特に心に残りましたことは、

1. 苦しみ、悲しみは、また一つの道を開かせてもらえるものであること。
2. 参禅会に集まる人々は、皆求道者であり、求道者のいちばん心しなくてはならないことは、思いあがりであり、どういう心がまえで、何をするか、常に謙虚でなくては、正しく物を見ることができない。

などを気づかせていただき、八正道の実践をあらためて一同、心いたしました。

終って昼食、記念撮影、反省会の順序で午後一時半に終了いたしました。食事は、一緒に「五観の偈文」を唱え、精進料理をおいしくいただき、心新たな一日を終りました。

〔参加者〕

木村誠治、宗藤幸生（以上僧職）
青柳守英、安野昌彦、安野みね子、
五十嵐嗣郎、石井勇、小畑節朗、
新井徹、新井みち子、片桐亮、
加藤健之、金崎央、川上寿美子、
河谷博、久保田アヤ、杉浦上太郎、
神戸正、高野千代子、武山喜代子、
小嶋進、小嶋喜子、上平瀬浩、
佐藤征志、沢村国勝、塩崎康之、
四宮清二、下村忠男、添田昌弘、
高間利介、武田博志、寺田健二、
富田文子、平沢満代、森岡俊雄、
原力三郎、三浦邦彦、村井ハマ、
三町勲、森正、徳山浩、渡来正夫、
八木下真司（以上会員、順不同）

成道会のご挨拶

沼南町　高間利介

成道会もだんだんに回を重ねるにつれて風格が出てくるように思われるのは、日頃の老師の真摯なご薫陶とみなさまの精進の結果の賜と同慶に存じます。

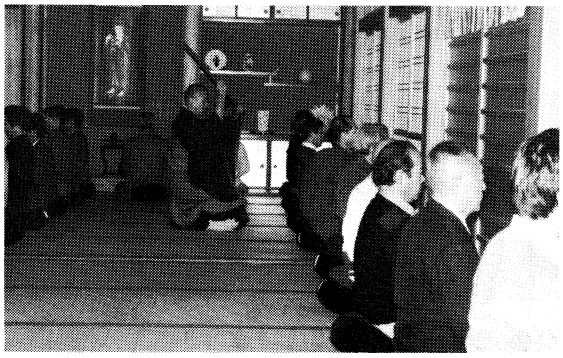
さて、先日バスの中で小耳にはさんだ乗客の話をお伝えします。多分どこぞの学校の先生と若い生徒と推察しますが、

「学校の校風、即ち文化的伝統ができ上るには二〇年かゝる。創立時代、校長の苦労はこの基礎作りの一点に集中される」ということで、わたくしは「なる程大切なことだ」と思って聞いておりました。

こちらの参禅会は始まって漸く一六年、これからいよいよ龍泉院の、いや千葉県の伝統的文化行事になる。ひょっとすると、われわれ同人が二一世紀に贈る最大遺産の一つになる。こう考えて今後の精進に努めたいものと存じます。

また、来年からはわれわれの重要行事というか、一里塚として一泊参禅、大施餓鬼会、成道会、この三つの山ができるのではないか。これはわれわれがなすというのではなく、自然発生的にこうなるのではないかと考える次第であります。

今日の洵に意義ある参禅に今後の報恩を誓うと共に愚考の一端を述べ、老師、諸先輩のお導きに感謝申し上げ、幹事、裏方をつとめられた御方々のご苦労にも、今後おかえしの努力を続けることをお誓い致します。



寒さを忘れる一瞬

坐りはじめのこと

船橋市　加藤健之

ご縁が有りまして、昨夏より共に坐らせて頂いております。以前からいつかは坐りたいと思いつつも、とりあえず書物を読みながら数年を過しました。

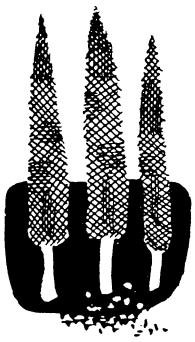
「書物禅」と言えば、「野狐禅」ほどではないにしても、蔑称には違いありません。とはいえ、蔑視の対象はあくまで「書物禅」であり、「書物」ではないことに最近気付かせて頂きました。

昨年『碧巌』の釈註本を入手し読み進むうち、椎名老師様の文献が引用されているのを見つけました。成道会の点心の後でその本をお見せしました所、公案集を読み切るための要点等を御指導下さり、最後に「良い本、本物を読まないといけません」とおっしゃって下さいました。

昨今の仏教書ブームで、書店に行くと沢山の本が並んでおり、中でも禅関係の書物が一番多いように見受けられます。印度から中国に禅が伝わって間もなくの頃から、「不立文字」の禅に文書が多いことも、―後世の求道者へ何かを伝えずにはおられなかった御先達の大慈悲心の結晶―と有難く受けとめたいと思います。それにしても本の数が多く、全てを読破することなど、死神と競争しても無理のようです。

「本物を読まないといけません」→「真贋を見分ける眼が要ります」→「まず坐りなされ」と凡夫の連想が回り出します。もちろん老師様はもっともっと深い真実を伝えていらっしゃるのでしょうが、小生の表現力ではここが限界です。

書物の挿絵を見ながら、家で数回坐って見ました。お寺様に来て坐りかたを正式にならいましたが、大きな誤ちはしておりませんでした。今も家で坐ります。お寺様に来る前と同じ坐相だと思いますが、大きな安心をいただいて坐っていることが、決定的に違っているのに気がつきました。これからも精進して一日一日を努力して行きたいと思っております。



インド旅行記(一)

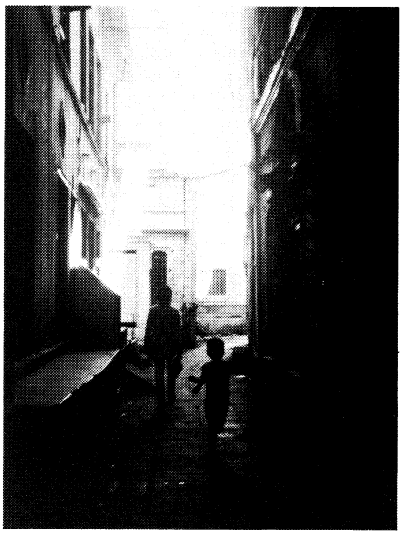
―ベナレスの仮眠室で―

柏市　武田博志

ネパールから空路で聖地バナラシ（ベナレス）に舞い戻ってきた。しとしと降る雨はインドでは珍しく、気温も二四度とかなり低く、肌寒く感じる。

空港から街まではタクシーで四〇分ほど、鉄道の駅舎が近づいたので料金を払おうとすると、某ホテルに泊れと言い張るばかりで受取らない。そのままホテルの入口まで運ばれて車を止めた。翌日ガヤーまで行きたかったので、とにかく駅まで行って汽車の時刻を調べ予約を取ることにする。大都市であっても汽車は一日数便だけ、曜日によってはない汽車もあり、夜行は必ず予約が必要である。

ホテルの前で所在なげに立っていた大男が、駅まで案内する、と走り寄ってきた。プラットホームの端をよじ登って構内に入り、時刻表の前に立つ。夜行は翌日になるので早朝の列車に乗ることにした。さっそくリタイアニングルーム（仮眠室）の空きを尋ねにいく。髭を蓄えた浅黒い男が椅子を勧め、待てと言って受付を出ていった。やがて白いインド服の老人が一緒に入ってきて手招きする。ホテルの大男にこっちへ泊るよというと目をむいて睨み、くやしそうにドタバタと帰っていった。約束したタクシー料金は駅の構内で強引に手渡していた。



ベナレスの路地

かくして、安心して駅の二等仮眠室に、ホテルの六分の一の料金で体を休めることになった。

七日前に歩き回ったこともあって、親しみのあるこの地で何人かのリキシャワーラーと怒鳴りあった。陽焼けした細い足で穴だらけの砂利道を人力車引きは大変に違いない。しかし降り際、交渉して了解した運賃をとぼけたり嘘をつくのでつい大声をあげてしまう。時間の観念は既にインド化して、私は丹念に乗る前の様子を繰り返えす。発音が悪くて聞き違えたと言訳さえする。根負けするのはいつも日本人ツーリスト。わずかな金銭で解決するなら喧嘩は避け、言い値を払ってさっさと日程をこなしたいと考える。白人は決して一歩もひかず大きな身振りで大騒ぎをして約束を守らせる。

インド人同士では、ツーリストの半分の料金で乗物を使う。稀に顔をくっつけて怒鳴り合っているのは、細かい身分の近いことを示していてあっさり数分で解決する。市場で店を張るのにいがみ合ったり邪魔をすると、喧嘩の根も深く、一時間以上も言い争っている。四〇人ほどの大きな人の輪の中央でなんとも必死の形相、警官が輪の外でニヤニヤ見物している。喧嘩の当人たちは滅多に手を出さない。傍を通りかかる人たちが人垣を大きくし、この人垣を見つけてスリが集まる。なんともあからさまな人間模様が展開される。

釈尊は出家前、王宮から庶民の様子をみて考え込んだという。説話にしても、インドでは鮮烈な光景にいつも取り囲まれている。いわば原色のイメージがそこにある。街は雑然としていて、決して清潔ではないが、事物の実体はむき出しである。私の色彩への平衡感覚が揺らぎだし、インドの色に鈍感になっていくと、自分を失いかけている。ある韓国人は北の脅威を説きながらも朝鮮人としての同胞意識を高らかに言い放ったし、あるドイツ人はゲルマンの血を誇りにした。私はといえば、他国でパスポートの番号を記入するときだけ一人の日本人になるという風なのだ。

開けっぱなしの二階の窓から、絶えまなく汽笛が聞こえ、白煙が噴き上がる。照明の消えた大部屋には二人の旅行者が綿のシーツをすっぽり被って眠っている。窓際に立つと大きな黒い汽車がひっきりなしに行き来している。汽笛は日本のそれより優しい音色で長く鳴っている。構内を照らす電灯の

下で、巨大なエネルギーの塊が動き回っている。一階には足の踏み場もないほど汽車待ちの客や駅を寝場所と決めている乞食たちが、薄布や毛布にくるまって横たわっている。インドの活気を集約したような駅の様子である。駅のざわめきが神社のお祭りを思い出させた。

夕食を摂りに駅前の食堂街に出かけた。チャーイ（ミルクティ）がおいしく三杯もおかわりをしたら笑われて、店の人たちと仲良くなった。ヒンディ語を習うと、それに隣の老人が得意気に英語の解説をする。夕暮の安食堂はゆったりとした人なつっこい顔にあふれている。店の奥の椅子を勧められ、後から入ってきた紳士も加わり賑やかなものだ。話に夢中になって一時間半もそこにいた。ああバナラシは素敵な街だ。こうして静かにインドの濃密な空気に浸って、ゆっくり時が流れていく。ベナレスの仮眠室で私はなぜか幸福だった。

市場の風景

「すわりなおせば仏の坐」を発刊

本年一月二日、故秦慧玉（はたえぎょく）禅師の三回忌命日を期して、龍泉院よりA五版一五頁の小冊子が発刊されました。

本書は、昭和五九年五月二五日、鴨川市永明寺で行われた大授戒会の第二日目に、秦禅師が四〇分間に亘ってご垂示された内容です。

本会員の藤原公さんが録音され、同じく小畑節朗さんがテープを原稿化し、龍泉院住職が編集し、小畑さんの実姉である小畑美津子さんの浄財寄捨による施印でした。

作刀と坐禅（五）

―刀鍛冶の心術―

船橋市　森岡俊雄

この辺で、鍛刀と禅の関係を書いて見ます。なにも刀を作る時だけでなく、日本古来の作業法はすべてを「感」に頼ります。

まず、鉄を火炉に入れ送風しますと、火炉いっぱいの炭が段々と減ってまいります。段々に羽口（はぐち）（送風口）上部まで減った時が、最高の温度になります。この送風の時間と炭の減り具合と鉄鋼の沸き具合が一致するのが難しい。これがピッタリと一致した時は、鍛冶屋の極意の一つと思います。

仕事に対して横座（鍛冶屋の親方の座る位置）に坐った時、何時も平常心でなければならない。そうしなければ駄目なのは判っておりますが、これがまた難しい。作業がうまくいっている時は割合いと誰れでも平常心でおれますが、うまくいかない時、瞬間に見抜いて作業を平常に持っていくには、どうしても坐禅の心得が必要である。且つ正師に付かなければ駄目である。正師に付かなければ駄目というのは、坐禅に限らずあらゆるスポーツも武道もみな同じであります。

さて釈迦如来は六年で成道されましたが、拙工（わたくし）は五〇有余年やっても成業しない。

これはいかなる理由か徹底的に考える必要がある。この場合、自分に天分がないと考えてはならないと思う。なぜか。外典（げてん）にも「信無くんば立たず」とある。これは二人以上の場合をいうのでしょうが、自分の天分に自分で信を置かなければ全然駄目でしょう。大体拙工は、自分の天分は「有りと観ずれば有り、無しと観ずれば無し」と思っております。これが正しいか否かは別として、自分としてはこれを信ずるのであります。

いつか御老師様は岡潔博士の例を引かれて、数学が判るか否かは零（ぜロ）が判るか否かであると教えられました。作刀の場合でもこれがいえると思います。それは刀の二大流派、あるいは三大流派の共通点の極意が、自分の作刀に具現出来るか否かであります。

この場合、これが具現出来れば一人前、出来なければ半人足と考えます。この考え方は世間一般に通りません。しかし拙工はこれが信条と信ずるのであります。

斯う考えますと、何も作刀に限らず技術の奥義を志す者にとっては、坐禅は絶対必要であります。拙工の場合、鎌倉期・南北朝時代の刀を目指しているのですが、ようやくその入口に立った感があります。七百年経た今日、伝わった技術に工夫を重ねて、ようやく鎌倉時代に比す「地金」を造り出すことが出来ました。この七百年の時間を越えさせてくれたのが坐禅であります。

自己を捨てて自己と対すること、原則がいつも原則として具現する心術は坐禅以外には無い、と拙工は信ずるのであります。拙工にとっての原則とは、前にいいました如く、「折れず、曲らず、良く切れて、使い易い」ということであり、これがいつでも現われるということであります。

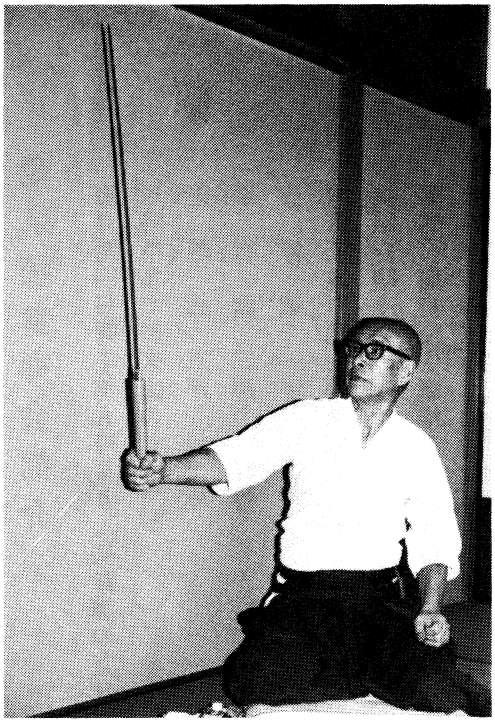
且つ正師に付かなければ駄目であると先に申しました。これはくり返しますが、何事によらず基本型があります。型は師匠が教えてくれたものをそのまま受けるのが一番良い事です。いわゆる「守」であります。「破」、「離」とは、理想の先生が居られない時、万止むを得ずやることだとも申しました。坐禅は「守」一点張りで行うものであり、それには必ず正師に付かなければ駄目であります。

『随聞記』を著わされた懐奘禅師は年下の道元禅師という正師について何十年も侍者となって、無私に修行された。この坐禅こそ「守」一点張りの坐禅だと思うのであります。拙工は坐禅は全く成っておらず、おこがましい限りでありますが、正師道元禅師を得て「守」に徹することが出来た懐奘禅師は誠にお仕合わせであったと、常々思っております。

拙工は馬鹿ですので、年令を考えず無茶苦茶の修行をして体調を損し、生れて初めて二〇日ばかり入院しました。この時正師のお言葉に〝年を考えろ、修行は自然体で行け〟とさとされました。六八歳にもなって、叱ってくれる師が身近におられることは、有難い事と存じます。

私の話は、これで一先ず終らせていただきます。

（本稿は以上で完結しました。）



観刀をされる森岡さん

各行事のご案内

○迦葉山一泊参禅の集い

期日　六月一三日(土)～一四日(日)
交通　バスにて往復
費用　約一五、〇〇〇円

○龍泉院大施餓鬼会

日時　八月一六日(日)午后一時
説教　中野東禅老師
法要　新盆・山門施餓鬼

○因脈会・講演会

主催　千葉県曹洞宗青年会
会場　千葉市　海蔵寺
日時　一一月一四日(土)午前九時～午后四時半
戒師　楢崎一光老師
講師　無著成恭老師
費用　未定

以上、三つの行事をご案内します。会員の皆さまにはふるってご参加のほどをお待ちしています。

竜泉院参禅会簡介

一、日時　毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと。）

一、坐禅　止静（しじょう）鐘　三声　坐禅
　　経行（きんひん）鐘　二声　経行
　　放禅　鐘　一声　放禅

一、講義　木版三通　開経偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聴く
　　講師　龍泉院住職椎名宏雄老師
　　昭和六二年二月より「山水経」の巻を提唱中

一、座談　自己紹介の後、茶を喫し座談
　　正午解散

一、参加資格　年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。

一、会費　無料

一、成道会坐禅
　　月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月六日）。
　　釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（　）内は座談の司会者

六一年
一〇月二六日　三〇名（武田　博志）
一一月二三日　三〇名（杉浦上太郎）
第四回成道会　一二月七日　四四名
成道会幹事　四宮清二　武田博志
一二月二八日　二二名（三町　勲）

六二年
一月二五日　三一名（森　正）
二月二二日　二八名（八木下真司）
三月二三日　二九名（五十嵐嗣郎）

▼第四回「成道会」は四宮、武田の両幹事により一二月七日盛会裏に円成いたしました。年々参加者が増えて、今回も法味を共にすることが出来ました。

龍泉院老師より「一日一訓カレンダー」を賜わり、会員平沢満代さんより手造りの「香袋」を全員に、又多くの方々より祝賀をいただきました。厚くお礼申し上げます。

▼千葉県曹洞宗青年会主催第八回「接心」が本年も八千代市の長福寺に於いて去る三月六・七・八の三日間行われ、当参禅会より、小畑節朗、沢村国勝、武田博志の三氏が参加、三日間の如法の坐禅と、木更津市東泉寺下室老師による『正法眼蔵』生死の巻のご提唱を拝聴しました。七日夜半よりの春雪が大地を覆い、満目白銀世界、清浄地での接心でありました。

▼柳田聖山先生は『禅思想』（中公新書）のはじめに路傍の死を掲げ、「ブッダもまた、最後は路傍の死者であった。行きだおれである。それが、もっとも自然な最後だったのだ。仏教徒はもういちど、この事実を想いおこしてよいであろう。」といっておられます。世尊、菩提樹下の坐禅の周辺というのか、武田氏のインド旅行記は我々の生死に決して無縁ではなく、虚飾の一つ一つを落として行った後に残って、はしなくも見せてくれる生の断面図のようであります。

（節光記）

●発行／天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎0471(91)1609
●印刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116—45　☎0471(43)3131